

# 品川郷土の会 会報

令和3年(2021)10月  
復刊第118号

発行人 坂本道夫  
編集人 野口健夫

## 第465回例会

新型コロナ再燃による緊急事態宣言も9月末で終了し、予定通り第465回例会を10月23日午後、中小企業センター中会議室で開催しました。残念ながら予告したように講師の都合がつかず、通常通り身内勉強会形式となりました。晴天に恵まれ11名の方が参加しました。演題は会報116号、117号で紹介した品川区内映画館の続編で、戦前の旧大崎地域(目黒、五反田、大崎)の映画館を取り上げました。

～戦前あった目黒・五反田・大崎の映画館～  
副会長 野口健夫

## まえがき

前回紹介した通り1903年(明治36年)に開業した「浅草電気館」が日本における映画館の始まりだが、無声映画時代から著名だった映画館が品川区にもあったことは余り知られていないようである。80年前の昭和16年(1941)時点、東京府荏原郡大崎町方面には、目黒キネマ、第一大崎館、松竹大崎キネマ、五反田映画劇場、龜齡館、大崎映画劇場の計6館の映画館が存在していた。

今回は、無声映画の弁士だった大蔵貢が経営した目黒キネマを中心にして、戦前の大崎地域の映画館について紹介する。

## 無声映画時代の弁士

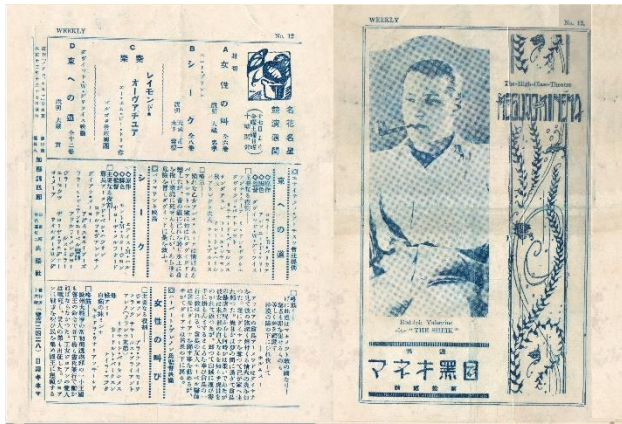
無声映画の説明者を現在では弁士と言うが、弁士たちは解説とか説明と言っていた。事実映画館のチラシでは説明・解説・説明者・説明部というような呼称になっている。

世界的な映画監督黒澤明は東大井の日本体育会官舎(現在の浜川中学校)で生まれた。画家志望だった、彼が映画監督になるきっかけは、子供の頃から映画好きだった兄の影響と中堅弁士で、徳川夢声など弁士仲間の支援が大きかったのではないかと。

兄黒澤丙午(へいご)は黒澤明より4歳年上で、映画だけでなく何かにつけて黒澤明に影響を与えている。その影響は、黒澤映画にも色濃く影響していると言われている。

## 目黒キネマ

1923年(大正12年)11月、東京府荏原郡大崎町上大崎621番地(現在の東京都品川区上大崎2丁目、目黒通り沿い山手線内側)、目黒駅東側駅前に松竹キネマによって、洋画専門館として開業した。開業時の活動弁士は徳川夢声である。翌1924年(大正13年)5月、浅草公園六区の千代田館から大辻司郎が移籍した。このころ、同館の楽隊は波多野鏝次郎のハタノ・オーケストラがつとめ、学生だった戦後はジャズ演奏で有名となった紙恭輔が在籍していた。



1924年(大正13年)10月の目黒キネマチラシNo12  
(弁士は大蔵貢、大蔵忠孝、大蔵正一、木下紫楼)

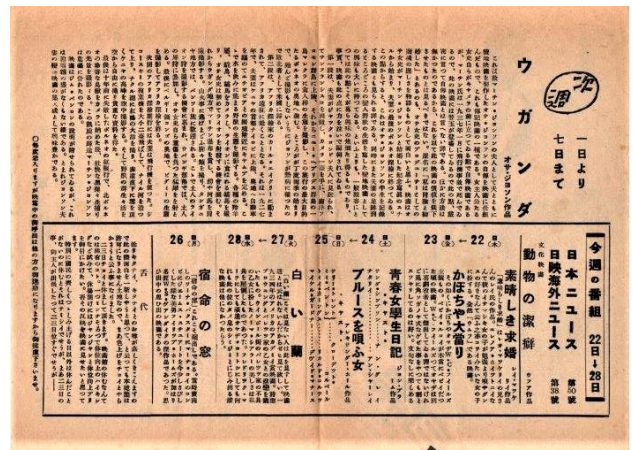
1926年(大正15年)、新宿武蔵野館に代わり、浅草公園六区の帝国館とならび松竹洋画の旗艦館となった。

昭和6年(1931)10月15日、活動弁士大蔵貢が同館を買収し、同日、従業員9名を解雇した。全員、関東合同労組映画支部に加入し争議になり、同年12月、解雇2名、解決金600円、2名の再就職に尽力を条件に解決した。1932年(昭和7年)10月、エノケン一座を脱退した北村武夫による軽演劇劇団「フォーリー・ベルジュール」が目黒キネマで旗揚げ公演を行なった。

1937年(昭和12年)、大蔵貢による経営が行き詰まり、同じ活動弁士出身で、早稲田全線座経営の樋口大祐が同館を買収した。

1945年(昭和20年)4月15日、第二次世界大戦末期の空襲で焼失し廃絶した。

戦後、1955年(昭和30年)、目黒駅の反対側(山手線外側)に、映画館の目黒金龍座および目黒オリオン座が開業し、1976年(昭和51年)合併した後、「目黒シネマ」を名乗っている。これは企業的として「目黒キネマ」の延長線上にない映画館だが、現在の経営会社は大蔵映画(株)で経営の継続は無くても大蔵貢の流れになっている。



1940年(昭和15年) 目黒キネマ No294号チラシ  
(洋画専門館である。近々模様替えのため休業すると告知している。観客投稿欄があるのが珍しい。)

## 無声映画時代喜劇映画の公開記録

無声映画時代はバスター・キートンなど三大喜劇王が活躍している。『デブのスキー



バスター・キートン

トホーム』というキートンの無声喜劇映画作品は、当初、千代田館(浅草区浅草公園六区三号地、1911年11月開業 - 1976年閉鎖)で大正12年

(1923年)8月15日からのタイトルで日本初公開された。

本作はデブ君の女優殺害嫌疑事件のため、米国ではお蔵入りとなった作品で、初公開はイギリスである。原題は色々あるが、日本での原題は「Freight Prepaid」である。

作品フィルムが逸失しているので本当の原題は不明である。この作品の日本初公開の記録は「活動雑誌」第九巻11月号に掲載されている。関東大震災で各社の活動写真の雑誌の発刊が一時停止する事態となり混乱している。震災前の1923年(大正12年)8月11日発行の「キネマ旬報 No.142」主要外国映画批評欄に『スキートホーム』日本公開の記録がある。



1923年(大正12年)目黒キネマ『デブのスキートホーム』広告(弁士は大辻司郎(1896-1952)である)

千代田館での公開後は、関東大震災発生前日の大正12年(1923年)8月31日に同じ番組が目黒キネマで公開された。しかし、翌日の9月1日に発生した関東大震災により、この作品が上映されたのは8月31日一日だけだったと考えられる。

それでも目黒キネマは震災による被害が少なかった様で、11月には徳川無声が主任活動弁士する上映広告がでていいる。多くの常設館が倒壊、焼失するなかで、日活系列の牛込館は倒壊せず、焼失した日活本社を同館に移し、10月上旬から上映再開している。また、新宿の武蔵野館も同じく10月から上映再開している。児玉数夫著「活動狂時代」によると武蔵野館と目黒キネマが拮抗してその覇を競ったようである。

## 目黒キネマと文学

由緒ある映画館なので、太宰治ほか多くの作家の著作に実名で登場する。

- ① 太宰治『正義と微笑』(1942年発表 / 青空文庫、
- ② 山田風太郎『滅失への青春 - 戦中派虫けら日記』(大和書房、1973年 / 筑摩書房ちくま文庫、1998年6月 ISBN 4480034099)
- ③ 大岡昇平『少年』(『大岡昇平全集 第13巻』、中央公論社、1974年 / 『ちくま日本文学全集 大岡昇平』、ちくま文庫、1992年6月 ISBN 4480102345)
- ④ 向田邦子『あ・うん』(文藝春秋、1981年5月 / 『向田邦子全集2 小説二 あ・うん』、文藝春秋、2009年5月 ISBN 4166416901)
- ⑤ 竹内好『竹内好全集 第15巻 - 日記』(筑摩書房、1981年10月)
- ⑥ 櫛田ふき『八度めの年おんな』(岩波書店、1995年3月 ISBN 4000029657)
- ⑦ 森本房子『喪失の時』(創樹社、1999年8月1日 ISBN 4794305559) - 『未成交響楽』上映館として登場(文中では『未成交響曲』)

## 太宰治 『正義と微笑』

1942年(昭和17年)6月10日、まだ無名の藤田嗣治画伯が装幀を担い、錦城出版社から発刊された日記風にかかれた青春回顧録小説で、四月二十日の件に目黒キネマでの映画鑑賞が登場する。

太宰治は、昭和5年(1930)12月大崎町下大崎の北方四郎宅、昭和6年(1931)2月大崎



町五反田 1 丁目島津家分譲地、昭和 7 年 (1932) 9 月芝区白金三光町 276 の大島圭介宅、と三度この地域に住んでいて、目黒駅周辺の土地勘はあったのだろう。



『正義と微笑』装丁

## 五反田映画劇場

山手線の内側、島津山下の五反田 1 丁目 263 番地 (現在の東五反田) に在った映画館である。1933 年 (昭和 8 年) 前後、新興キネマの契約館として開館した。第二次世界



外観図スケッチ

大戦後、直ちに再建され、1947 年 (昭和 22 年) 7 月に新築・開館、松竹系の一番館 (封切館) として稼働した。その後、TY 紅系 (東宝洋画系) に興行系統が変わったが、1973 年 (昭和 48 年) に閉館した。開館以来、簇興行が経営し、作家の山田風太郎や巖谷國士が通ったことでも知られる。



1939 年 (昭和 14 年) 3 月五反田映画劇場チラシ No12 (色刷で紙質も良い。多種多様な映画を上映する)

昭和 14 年から昭和 18 年までのチラシを比較すると、昭和 16 年の戦争開始前は、彩色刷三つ折りで、内容的に娯楽性が高い。昭和 18 年になると、紙質が悪くなった三つ折りや紙型が小さくなった二つ折りになり一色刷である。内容的にも戦時色が強く、チラシの特報欄では『穏忍にも限度がある 待ちに待った世界の敵 米英を徹底的に叩きつける時はきたのだ！ 皇軍の武威は戦端開始以来 今日迄 大戦果につぐ大戦果を以ってし 世界を驚倒せしめた。』と謳っている。映画は「第五列の恐怖」「雲月の海の母」「將軍と参謀と兵」のような軍事物の間に「大東亜戦争戦況特報」など戦争う関係ニュース



を流していた。

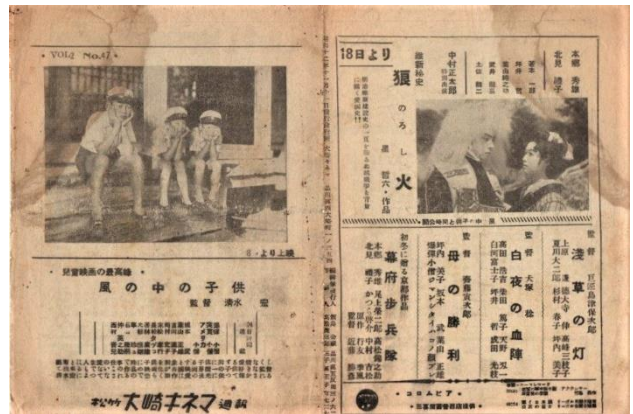
昭和 18 年末期のチラシには、傷痍軍人が多かったのか「男女席の区別をお守りください」「お煙草は喫煙室でお願いします」のほかに「白衣の勇士に席を譲りませう」という注意書きが入っている。



1943 年(昭和 18 年)初旬五反田映画劇場チラシプログラム欄は、戦時色が全面に出ている。

### 松竹大崎キネマ

大崎広小路先の西大崎 1 丁目 354 番地(現在の西五反田 7 丁目)に在った映画館である。開館時期や閉館時期は明確な時期は不詳だが昭和 12 年(1937)から 14 年(1939)のチラシが入手できたのでその一部を紹介する。



1937 年(昭和 12 年)松竹大崎キネマチラシ(表記は左書きと右書きが混在している)

### 大崎館(大崎映画劇場)

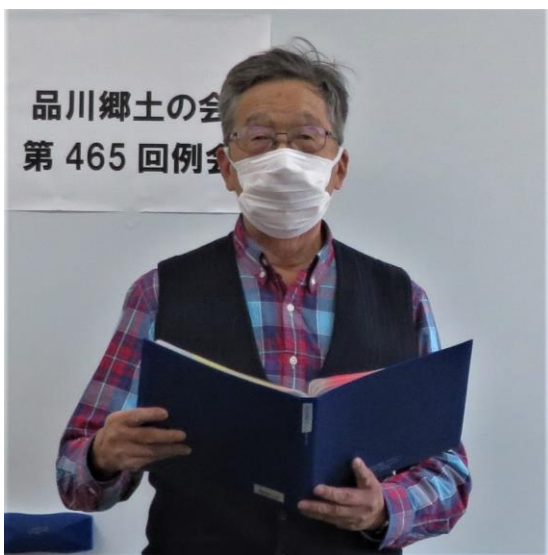
正確な年代は不明であるが 1910 年代に東京府荏原郡大崎町五反田 2 丁目 377(現在の西五反田 1 丁目 28)に開館した映画館である。昭和 16 年地図では大崎映画劇場となっている。

1938 年(昭和 13 年) 6 月に設立されたばかりの東横映画がこれを買収し、同年 11 月、同社の 2 館目の直営館東寶五反田映畫劇場(東宝五反田映画劇場)として新装開館、東宝映画の封切館として稼働した。1939 年のチラシを見ると翌年には、東横五反田劇場と改称したようである。

第二次世界大戦後、直ちに再建され、1946 年(昭和 21 年) 1 月、五反田東横映画劇場として開館する。1951 年(昭和 26 年) 4 月

1日、合併によって東映の直営館となり、五反田東映劇場と改称しました。

## 当会関連団体などの動向



野口副会長講演

### 『写真集 品川区の昭和』 発刊

坂本道夫会長監修の『写真集 品川区の昭和』が10月15日発刊され、品川区内の書店に並びました。ネットニュースによると事前予約の状況も良好とのこと。



### おわりに

今回は、目黒キネマ、松竹大崎キネマ、五反田映画劇場、大崎館(大崎映画劇場)を手元資料で紹介しました。龜齡館、第一大崎館の2館の場所は特定しましたがチラシなど見当たりませんでした。また外観写真は『大崎町史』、『荏原区史』やその他関連写真集に掲載がなく、1館だけです。お手元にチラシや写真があれば是非ご紹介いただきたい。

### 【参考文献】

1. 1923年(大正12年)8月11日、キネマ旬報No.142「各社近着外国映画紹介」欄、キネマ旬報社
2. 1967年(昭和42年)1月、児玉数夫著、「三一新書 活動狂時代」、三一書房
3. フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』
4. 1942年(昭和17年)6月10日、太宰治著、藤田嗣治装幀、正義と微笑、錦城出版社
5. 昭和16年(1941)、大東京区分図 品川区詳細図、ゼンリン



本件に関して、10月21日10時から13時まで、お笑いのタカガキがMCの品川ケーブルテレビ・しながわアイの取材があり、執筆の一部を担当した野口副会長が対応し、写真集と現在状況の比較を撮影しました。

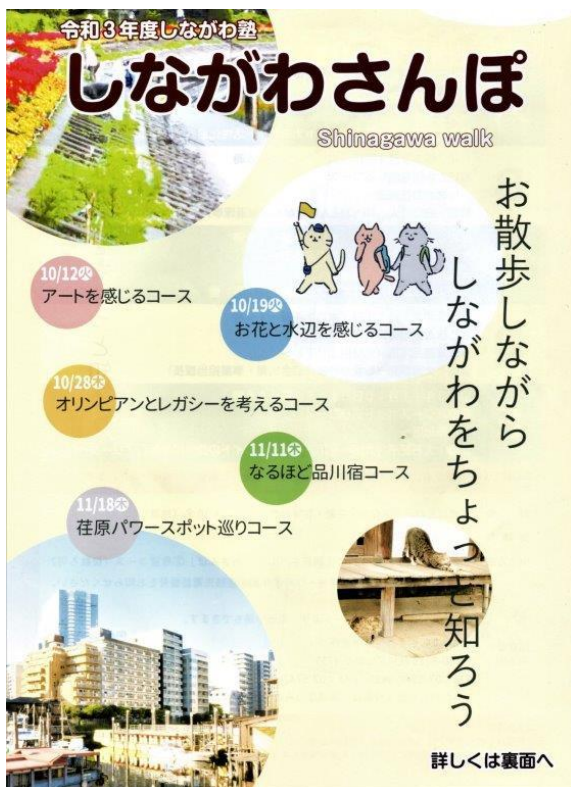


## 令和3年度「しながわ塾 しながわさんぽ」 「お花と水辺を感じるコース」開講

肌寒い曇天の下、10月19日(火)13時45分から、京急立会川駅を起点、しながわ区民公園水族館口を終点とした品川区主催の散策が開催されました。受講者はコロナ禍対策で抽選選抜された10名(倍率5倍)です。講師はしながわ花海道渉外担当理事を兼務する野口副会長としながわ花海道の永尾総務理事が案内しました。

コースは、立会川駅⇒龍馬像⇒砲台⇒花海道⇒鮫洲入江広場⇒花海道⇒品川区民公園⇒勝島の海、約4キロの散策です。品川区民でありながら、花と水辺中心の散策は参加者に目新しい散策で好評だったようです。

別のコースもあるので広報に注意してみてください。但し各コース10名なので抽選になると思います。



## 2021 いりあらい秋の文化フェスタ

本会で講演されたこともある田部先生や荏原文化センターで切り絵実演をされたことのある酒井先生などの作品が展示され、入新井地区の史跡関係パンフレットを配布しています。

期間：10月20日～11月9日

場所：アトレ大森 5階レストランフロア  
ギャラリー

## 品川区 文化財一般公開

品川区内地域にて下記史跡の秋の恒例「文化財一般公開」が行われます。

### ●旧三井文庫第二書庫(国登録有形文化財)

※30日(土)、31日(日)、11月3日(祝)のみ公開

場所：文庫の森 豊町 1-16

最寄駅：戸越公園駅 6分

### ●鰻絵天鈿女命功積図

場所：寄木神社 東品川 1-35-8

最寄駅：新馬場駅北口 7分

### ●千躰荒神堂奉納扁額

場所：海雲寺 南品川 3-5-21

最寄駅：青物横丁駅 4分

### ●紙本着色六道絵

場所：長徳寺 南品川 2-8-16

最寄駅：新馬場駅南口 6分

### ●伊藤博文墓

場所：伊藤博文墓 西大井 6-10-18

最寄駅：西大井駅 3分

### ●木造五智如来坐像

場所：養玉院 西大井 5-22-25

最寄り駅：西大井駅 8分

### ●居木神社末社巖島神社(旧松原家屋敷神)

場所：居木神社 大崎 3-8-20

最寄駅：大崎駅西口 5分

## 郷土・郷土史関連図書情報

地元や郷土史に関連する新刊図書を紹介します。興味のある方は、品川歴史館、書店等で購入するか、近くの図書館で閲覧下さい。なお、区内図書館は事前に COVID19 の閲覧制限を確認の上お出かけください。

### 1. 古写真を見て歩く

#### 江戸・東京歴史探訪ガイド 改訂版

最近よく目にする写真集タイプのガイドブックで、以前出ていた本の改訂版です。品川駅から鈴ヶ森までの古写真と現在の写真が取り上げられていますが、ボリューム的に少ないので他書籍に勝るようなビックリする新鮮な写真は見当たりません。



著者：「江戸楽」編集部  
出版社：メイツ出版  
判型：B6判  
頁数：130頁

価格：1793円(税込)

発売日：2021年4月1日

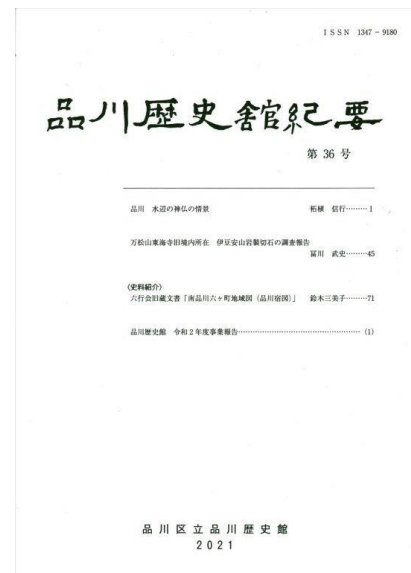
ISBN：978-4-7804-2456-0

### 2. 品川区立品川歴史館 紀要 第36号

品川歴史館学芸員の柘植信行、富川武史、2名が執筆しています。柘植信行は「品川水辺の神仏の情景」で日本書紀に記述のある「多氷」を取り上げ、丁寧に多面的に検討しています。注記が丁寧に取り上げられていますので、文献調査には便利でしょう。

富川武史は「万松山東海寺旧境内所在伊豆安山岩製切石の調査報告」で現物の調査結果を報告しています。

その他、昨年度企画展についての概要がまとめられています。



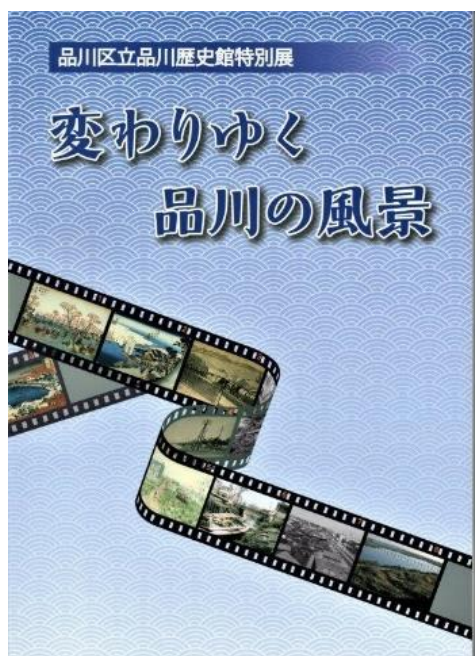
編者 品川区立品川歴史館  
出版社 品川区立品川歴史館  
価格 1000円(税込)  
頁数 110頁  
発売日 2021年9月1日  
判型 B5版  
ISSN 1347-9180



### 3. 品川区立品川歴史館特別展 図録 『変わりゆく品川の風景』

前号で紹介した10月9日から12月5日まで品川歴史館で開催されている、特別展の図録です。実物は浮世絵などの保護のため、照明を暗くし展示期間を短縮し入れ替えていますので、全体像を掴むには図録の方が良く分るでしょう。前回の八潮地域で品川区の各地域の特別展は終わり、今回はその総括的な企画展になっています。

江戸、明治、大正、昭和、平成、と目まぐるしく変化する「品川区」を歴史館が所蔵する、多くの浮世絵、絵画、写真、絵葉書でなぞっては如何でしょう。



編者 品川区立品川歴史館  
出版社 品川区立品川歴史館  
価格 1000円(税込)  
頁数 116頁  
発売日 2021年10月9日  
判型 A4版

## 当会ほか関連行事について

### 当会 第466回例会のお知らせ

次回第466回例会は、坂本会長の案内で企画展を参観し、近隣場所を散策したいと考えています。詳細内容・出欠確認は、追って往復はがきで、ご案内いたします。

日時：11月27日(土) 13時30分-  
集合地：品川歴史館ロビー  
案内者：会長 坂本道夫  
参加費：無料

(復刊118号おわり)

品川郷土の会や本誌についてのお問合せは、  
〒140-0001 品川区北品川3-6-13-503  
携帯電話 080-5497-4633 坂本まで  
会長 坂本 道夫

※活動の詳細は「しながわ すまいる ネット」  
をご覧ください。